



90-93-5083

慶應義塾大学ビジネス・スクール

HIV ポジティヴ (B)

—職場にエイズ感染者がいた—

5

翌週の月曜日、上野銀次第2営業部長は人事部に足をはこび、打ち合わせ中の大塚五郎人事部長を呼び出して「ちょっと考えを聞かせてほしいのだが」ともちかけた。エイズ問題がマスコミで大きく取り上げられているし、当社としても問題が起きる前にきちんと社内教育でもやり始めるべきではないのか、人事部ではどうしようとしているのか、というのがその話の主旨であった。大塚人事部長は忙しいなかを呼び出されたからか、迷惑そうな表情で「エイズ問題は重要な課題として考えており、人事部の検討リストの中にも入っている。近いうちにエイズ教育を含めて総合的な対策を考えようとしているところだ。」と言って、足早にミーティングへもどつていった。人事部は査定の時期に入っており、誰もが忙しそうに仕事を進めていた。

第2営業部にもどると、朝一番で本格的な作業の開始を指示しておいたのをうけて、当面の目標としたマーケット・セグメンテーションと新製品のコンセプト作りに向けて、メンバー全員が活発に動き回っていた。上野部長もいつもの忙しさに身をまかせていく心地よさを意識しながら、プロジェクトチームの抱える隠れたエイズ問題への切迫感が薄らいでいく感じがしていた。

その後、渋谷利男の顔を見て「エイズ」の3文字を思い浮かべ「難しい問題だ、困ったもんだ。」という意識を持つことはあっても、熱心に自分の考えを主張しながらチームをもり立てている姿に病気のイメージを持つことはなくなってしまった。同時に「今すぐ何とかしなくては。」という気持ちも風化し、通常の営業部隊と特別プロジェクトチームの両方に采配をふるう忙しい毎日がすげていくようになった。

3か月ほどすぎたある日の午後、特別プロジェクトチームのまとめ役になっている大崎裕志が部長席に近づき、「部長、ちょっとお話しが。」と言った。大崎は開発部門から引き抜いてきたマーケティングのプロであった。その彼が「ここでは話しくいので、そこの会議室で…。」と深刻

.....

本ケースは、クラス討議の資料として作成された架空事例であり固有名称はすべて想像上のものである。慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授高木晴夫が作成した。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8523 神奈川県横浜市港北区日吉本町2丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail:case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/> 慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

Copyright©高木晴夫 (1993年4月作成)

10

15

20

25

30

な顔で言うのであった。

「渋谷君のようすが変なんですよ。最近やせてきたみたいで、仕事もだるそうです。心配して声をかけても、何か気になることがあるみたいで、なかなか返事をしなくなりました。あんなに明るくバリバリ仕事をしていた彼とは別人のようです。何か病気をもっているんじやないかと思います。
5 おかげでチームの仕事はガタガタです。彼の担当している新製品のチャネル作りは進まないし、あっちこっちでトラブルを起こしてくる始末です。渋谷君は東南アジアにショッピング旅行にいってたでしょう、だから、あいつはエイズなんじやないかとチーム内でうわさする声がでてるんですよ。もう何か手を打たないと、予定どおり作業が進まない状態です。」

上野部長はこれを聞いて「ギクッ」とした。渋谷利男のエイズは発症段階まで進行したのかと内心あせるものを感じながら、「マズイことになった。急いで何とかせねば。」と思った。「わかつた、すぐに彼と話してみよう。」と大崎に言い残し、あわてて会議室を出た。
10

不許複製
